成蹊大学　日本探求特別講義 B

2013年後期　和本と電子書籍

第８回　本を伝える古書の世界

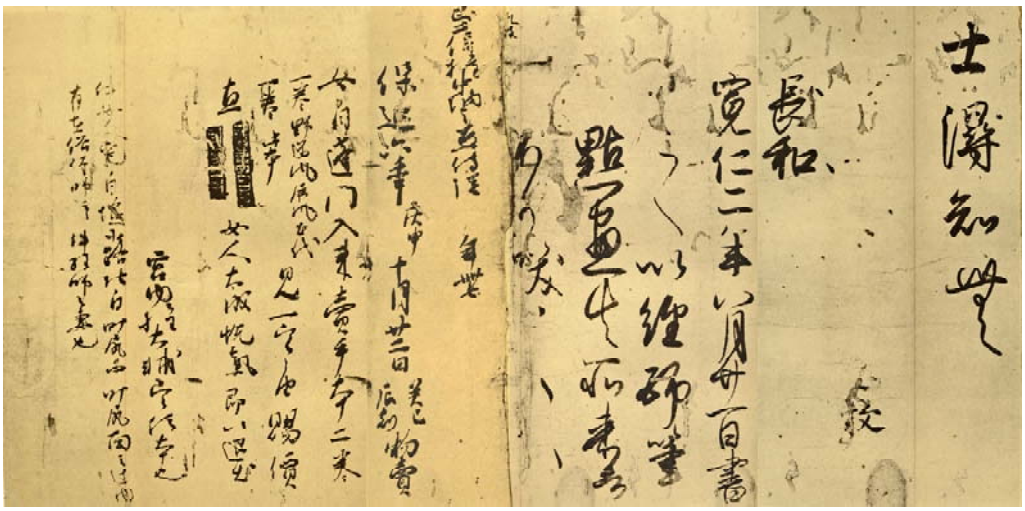
橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

中世の始まりとされる12世紀、それまで書物は寺院や朝廷から外にはなかなか出なかった。そのような需要がほとんどなかったのである。その一方で、日本人は書物を「伝存」の対象として考えていた。一冊の本が一世代で終わることはなく、何らかの形で次世代に継承された。所有者だけでそれを実行するのは限界がある。誰かがその仲介をする必要があった。それが今日まで続く。

本屋の起源

寺院の書庫にあるものはともかく、個人で持っている本は、いつかそ手放すときがくる。自家の子孫にそのまま伝わるならよいが、事情によってそうはいかないこともある。その場合は、金銭に換えて売る。それを「沽却（こきゃく）」といった。当時としては、不名誉なことだったので表には出にくかった。

逆にそうして売られた本を金銭で入手することを「不慮感得（ふりょかんとく）」などという。「思わず手に入れた」といおうニュアンスである。あまりおおぴらにできないので、婉曲な表現になっていた。



そういう時代に、かろうじて表に出た事例がある。

藤原行成（ふじわらのゆきなり）が寛仁2年1018）に筆をとったとされる『白楽天詩巻（はくらくてんしかん）』（東京国立博物館所蔵）に、藤原定信（さだのぶ）（行成から四代目）が巻末に書き入れたところに

保延六年庚申十月廿二日癸巳辰刻　物売女自蓬門入来、売手本二巻　一巻小野道風屏風土代一巻此本　見一定之由、賜価直×××××、女人太成悦気、即以退出。

件女人宅自塩小路北、自町尻西、町尻面之辻内有在俗経師云々　件経師之妻也

とある。これを訳すと

「保延六年（1140）庚申十月二十二日の朝、物売りの女が蓬門より入って来て手本二巻を売りに来た。一巻は小野道風の『屏風土代（びょうぶどだい）』（これ消してけしてしまった）を与えたら女は喜んで帰って行った。

これは宮内権大輔である私・定信の本である」

さらに追記して「件（くだん）の女人の宅は塩小路より北（東洞院大路の七条辺か）にあり、そのあたりの町尻西から面之辻には在俗の経師（きょうじ）がいるといい、女はその経師の妻である」

これが「古本屋」の史料として目にすることのできる最古のものである。

経などをつくる仕事をする者を経師（きょうし、もしくはきょうじ）といったが、12 世紀には京都の町中にも在俗の経師がいて、造本だけでなく本の売買も手がけていたらしいことがわかる。

経師の役割

奈良時代から経典の作成（写経など）が盛んで、書かれた経は巻子にして製本された。そのための紙を用意し、糊で紙を継ぎ、立派に仕立てる仕事をしたのが経師の起源である。平安時代になっても寺院に属しながら下級僧として専門職となっていた。**右図は中世の経師と仏師**

そのうち、高野山のように鎌倉時代から経師が製作するだけでなく頒布することにもかかわっていた。作成した経典などを値段をつけて売っていたのだ。藤原定信のところに売りに来たのが経師の妻ということは、たんに本を作るだけでなく、売買も手がけていたことを示す。これは中世の間に広がったのであろう。

ポルトガルの宣教師がつくった16世後半の『日葡辞書』に、「経師屋」の項目があり、「経開き、拵（こしら）え、綴（つ）づる家。印刷所または本屋」とあり、経師が本をつくるだけでなく、販売にかかわっていたことを示している。

この職業は江戸時代も盛んで、出版、暦の製作販売のほかに、掛け軸や襖（ふすま）の製作（表装（ひょうそう）という）と修復を行っていた。修復・表装は現代でも続いている。**→江戸時代の経師屋**

江戸の本屋は出版も古本も

江戸時代になると、京都から出版を兼ねた本屋（書林とも）が生成する。店を構えて、新刊から古本まで並べていた。大坂や江戸では古本が先で出版は17世紀後半になってから。

すなわち、江戸時代の本屋というのは、出版のほか、自店の本を卸売（おろしうり）販売しながら、他店の出版物を含めた新刊書の小売をし、さらに古本の売買までおこなっていた。今日でいう版元（はんもと）、取次（とりつぎ）（問屋）、新刊書店、そして古書部門を一軒で行なっていたのだ。

現代では、書籍を刊行する出版社（版元）、流通を担う取次、一般の新刊を小売りする書店、古書を売買する専業の古本屋などが別々に存在する。これは明治二十年すぎから近代以降の書籍関連業界の形態として発達してきたもので、江戸時代とは違った風景なのだ。

江戸時代からの古本屋の仕事

このように江戸時代の本屋の主人は、編集者も古本こなす広い書籍関係の経営者でもあった。そこには、本に対する「目利き」が必要だった。十分な仕入れをするために、古い書物の知識を持ち、貴重な本を見分け、売れ行きの良い本を判断する力が必要だった。

ただ、一人ですべてのジャンルを知ることは不可能なので専門化する。仏教書の得意な店、俳諧書専門の店、漢学の素養をもった店、大衆向けの本を専ら集める店などがあった。そうすることで、大都会ではいくつもの店が共存できた。大坂の心斎橋筋には、百軒以上の店が並び、現在の神田神保町のようであった。京都では南北は二条から五条あたりまで、東西は烏丸通りから河原町までのエリアに主要な本屋があったので、交通機関のない時代でも一日で回れた。江戸も書物屋は日本橋周辺（現在の中央通り）に、大衆本の地本屋は通油町（とおりあぶらちょう）（現在の大伝馬町一帯）に集中していた。

そこには、絶版となったもの、手書きの写本も含まれる。巻物から掛け軸、折本などさまざまな装訂の本も混在する。一枚刷といわれる綴じていないものも商品として重要な位置にあった。例えば、地図は畳二枚ほどもあるような大きな図を折りたたんで売られたし、歌舞伎などの芝居番付、カラー刷りの浮世絵（錦絵（にしきえ）という）は人気商品だった。

堅い本としては、中国輸入の書物（唐本（とうほん））は高価な「舶来品」として重要だった。

現代の古本屋　古典籍展観大入札会

古書業界の中に「東京古典会」という組織があり、毎週和本類の書籍を専門にする古書市場を神田にある古書会館で開いている。およそ30軒の専門店が自主的に運営しており、すでに百年の歴史がある。
毎週火曜日の市場には、数百点の和本類が全国から寄せられ、そこで入札で取引されている。
いろいろなものがでてくるもので、書籍ばかりでなく、錦絵や地図、掛軸、巻物、古文書など多くの種類。
その会が年に一度お祭りのように開くのが、古典籍展観大入札会と銘打ったオークションで、一般の人にも出品物を自由にみてもらうようになっている。
2013年は11月15, 16日に実施。約1700点が出品される。

会場：千代田区神田小川町 3-22　東京古書会館　10 時から 18 時（16 日は 16 時まで）
だれでも自由に入れる。

版本（印刷された書物）

奈良時代から明治期まで　国文・歴史・地誌・仏教・医学・科学・絵本・諸芸

「百万塔」日本最古奈良時代の木製の塔と経文　「碧巌録（へきがんろく）」南北朝時代の禅宗の出版物（五山版）
「嵯峨本（さがぼん）伊勢物語」江戸時代初期の美麗な活字版　「平家物語」江戸時代初期の活字版
「日本永代蔵」西鶴の浮世草子　「隅田川（すみだがわ）両岸一覧」川沿いを絵巻風にしたものの折り本
「富岳百景」葛飾北斎の富士山の絵を集めた絵本　「雪華図説」雪のさまざまな結晶を写生したもの

唐本（中国で刊行された本）　元代から清朝まで、拓本、朝鮮本も

「松雪斎文集」元代の貴重な本　そのほか明代の活字本

古地図　17世紀から万国図、江戸の町絵図など

浮世絵　印刷された色刷りを錦絵という　広重・豊国など　銅版画も

複製本　精密に複製された本は数十万円するものもある

洋書　ヨーロッパの古い書物のうち、日本関係のもの　ちりめん本も

写本（手書きの本）

奈良時代の古写経から、平安時代の歌集、中世の仏教関係書、奈良絵本

「大般若経各種」とくに奈良時代のものも　「古今集」鎌倉時代から。及び名物切（きれ）
「しうゆう」「伏見常磐」　珍しい室町時代のお伽草子の奈良絵本

江戸時代の　絵巻・国文・歴史・地誌・仏教・医学・科学・絵本・諸芸

「源氏物語」の華麗な写本。「後三年合戦絵巻」「伴大納言絵巻」などいずれも江戸時代の写しだが。美しい絵巻が多数
狩猟や捕鯨、鉱山などの絵巻。新陰流など武道の免許状、花火の伝書、動植物の精密な写生本

書画（日本中国の書や絵画）　近代文人まで

「夏目漱石書簡」「三島由紀夫の書」も

古文書　記録　書状

「織田信長、豊臣秀吉らの文書」「黒田長政文書」黒田官兵衛の息子

そのほか

かるた、双六、相撲の本、明治の写真帳